

# 令和五年度入学試験問題 国語（五十分）

二月一日(午後) 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は14ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督の先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

台所から戻ってきた母は、「外はどんどん冷え込んできとるよ」と肩をすほめた。確かに寒い。天気も悪い。十一月の終わりでも、山に囲まれたこの町の季節は、もう冬だ。もう先週から、朝には霜がおりているのだという。

「なあ、洋司」

母は急須のお茶を湯呑みに注ぎながら、「今夜は泊まれないん？」と訊いた。

「うん……ごめん、夕方から仕事だし、明日の朝までにホテルでやらなきゃいけない仕事もあるから」

いまは午後一時。あと一時間ほどで家を出なければ仕事に間に合わない。

「お昼ごはんぐらいは食べるじゃろう？」

「うん……でも、いいよ」

「朝から用意して、あとは揚げるだけなんよ」

母は僕が実家に帰るときは、必ずスコッチエッグとロールキャベツをつくる。子どもの頃からの大好物だ。洋食が「おふくろの味」になるといのが、A いまどきの中年男らしく、(注)ひろみ宏美にはいつも笑われてしまう。

「洋司が来るときぐらいのもんじゃけんねえ、揚げ物を家でするんは」

「……だいじょうぶなの？」

「なんが？」

①「だから……油とか、危ないからさ、あんまりやってほしくないんだよね」  
母はちよつと寂しそうな顔になって、「平気平気」と笑った。

「あと、ロールキャベツもつくってるの？」

「うん、あれはもう火にかけて煮込むだけじゃけんねえ」

「いまも？ 火にかけてるの？」

当然のようにならずいて、「とろ火で時間をかけて煮込んだら美味しゅうなるんよ」と笑う母に、② 思わず舌打ちしてしまった。

「危ないよ、止めてきてよ。いつも言ってるだろ、火にはとにかく気をつけてくれって」

狭い台所だ。昔の家らしく、居間からも遠い。万が一のことがあってもここには気づかないし、B 気づいたとしても、父や母にはなにもできない。

「ほんと、頼むよ、冬場にはストーブだって使うんだし」

この家では暖房に灯油ストーブを使っている。エアコンやファンヒーターでは、電気のブレーカーが落ちてしまうのだ。容量を上げようにも、家のつくりじたいが古いので、アンペアを上げると漏電の危険があるらしい。

「早く止めてきてよ。もしアレだったら、僕が行くから」

「ええよ、お母ちゃんが行くけん。ついでにスコッチエッグも揚げてくるわ」

母は、よっこらしよ、と立ち上がって台所に戻る。コタツに腰を落ち着ける間もなかった。部屋を出ると廊下の寒さに身を縮め、両手で胸を抱く。部屋の中と外の温度差は老人には危ない。わかっているけど、どうすることもできない。

④ 僕はため息を呑み込んで、湯呑みを手に取った。内側が茶渋で汚れている。老眼が進んでいる母の目では、もう気づくことはできないのかもしれない。

お茶を啜る。母に同じことを言うのでも、もうちょっと優しい言い方をすればよかった。いまになって悔やむ。父は黙って、窓の外に広がる冬枯れの野山の風景を見つめていた。

母がいなくなった居間は、また静かになった。

父は焼酎のグラスを手から離さない。もうすっかりぬるくなって、中に入れた梅干しもふやけてしまっているのに、「新しいのをつくり直そうか?」と声をかけても、黙ってかぶりを振るだけだった。

これが、父の晩年だ。一日中、居間の椅子に座って、なんの代わりばえもしない窓の外を眺めながら焼酎を啜って過ごす。ときどき新聞や本を読み、テレビを観ることはあっても、母の話に気のない相槌を打つだけで、誰とも交わらず、話さず、笑わない一日というものがどんなものなのか——僕には見当もつかない。きつと、いまの僕と同じ年齢の頃の父だって、自分がこんな老いの日々を過ごすことになるとは夢にも思っていなかっただろう。

高校を卒業して家を出るまで、父と二人でなにかをしたという記憶はほとんどない。子どもの頃の父はただ C 怖いだけの存在だったし、中学生や高校生になると父に反抗ばかりしてきた。大学入試を機に上京してからは、奨学金とアルバイトで生計を立て、父からは D 仕送りを受けなかった。就職も、結婚も、退職も、父には一言も相談せずに決めた。

⑥ あの頃の僕は、なぜあんなにも父に反発していたのだろう。

父はわが家の絶対的な君主だった。なにか気に入らないことがあると、すぐに声を荒らげ、ときには小学生の僕にも平手打ちをした。ぶたれた直接の痛みよりも、その前の、恫喝にも似た憎々しげな脅し文句のほうが、幼い僕の心に深い傷を残していた。父は酒が好きだった。わが家は裕福なほうではなく、たとえば中学時代に入っていた野球部では、ユニフォームはもちろん、スパイクやグローブ、バット、アンダーシャツに至るまで、すべて先輩からのお下がりを使った。野球部にいるのならグローブやバットぐらい買ってやらないと、という発想が両親にはなかったのか、あっても黙っていたのか、先輩の名前をサインペンで消した一着きりのアンダーシャツを物干し竿に干しながら、父の晩酌のための酒を切らすことはなかった、そんな両親だった。父に対する反発の半分は、父に決して逆らわない母へのいらだちだったのだと、いまは思う。

⑦ 父は強い人だった。あの頃の僕はそう思っていた。腕っぶりも、酒の飲み方も、博打も、仕事も、物知りなところも、怒りっぽいところも、ものごとを一方的に決めつけるところも、すべて。母も、僕が幼い頃からずっと「お父ちゃんは偉いんじゃない」と言い聞かせてきた。強い父親だから息子が反抗するのはあたりまえだよな、と生半可に納得もしていた。違っていたのだ。

父は、強くもなんともなかった。

⑧ 三十歳を過ぎた頃から、父との関係が微妙に変わってきた。反発することが減って、酔った父が問わず語り口にする思い出話にも素直に耳を傾けるようになった。

僕はもうおとなだった。夫でもあり、父親でもあった。

おとなの僕の目に映る父の姿は、子どもの頃よりも小さくなっていった。父が歳をとったからというのではなく、昔の父が身にならなくなった「強さ」の鎧が次々にはがれ落ちていったからだ。父は強いから毎晩酒を飲んでいたのでなかった。強いから妻や子ども相手に声を荒らげていたのではなかった。会社の上司のことを悪しざまに罵るのも、会社を何度も辞めてしまったのも、

強さからではなかったんだと、おとなの僕には、もう、わかっていたのだ。

父は強いふりをした弱いひとだった。

分厚くてたくましかった背中も、ごつごつしていた握り拳も、おとなの目であらためて振り返ってみると、他の父親と比べて勝っているわけではなかったんだと気づく。「生意気なことを言うな」と僕をにらみつけていたときのまなざしにも、問<sup>9</sup>無□□で押し切らなければならぬ微妙な気弱さがにじんでいたんだと、わかるようにもなった。そしていま、父は、もう、強いふりすらできなくなった

(重松 清『みぞれ』より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(注1) 宏美……「僕」の妻の名前。

(注2) 恫喝……おどしつけること。

問一 文中の A □ □ D □ □ にあてはまる語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア せめて      イ いっさい      ウ いかにも      エ ひたすら      オ たとえ

問二 ——— 線部①「母はちょっと寂し<sup>さび</sup>そうな顔になって」とありますが、なぜ「母」は「寂しそうな顔になっ」たのですか。もつとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 息子が本当は自分のことをひどく心配して言ってくれているのだということがわかったから。

イ 手料理で息子を喜ばせたいのに、肝心の息子は喜ぶどころかいやがってめいわくそうな様子だから。

ウ 久しぶりに会った息子は、母親である自分のことよりも仕事のことの方が気になっていようだったから。

エ 息子の言葉を聞いて、自分の身体が以前と比べてすっかりおとろえていることに初めて気づいたから。

問三 — 線部②「思わず舌打ちしてしまった」とありますが、この時の「僕」の気持ちの説明としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 楽しそうな母親には何を言ってもむだだとあきらめた。

イ 深刻な事態に気づいていなかった自分のことが情けなかった。

ウ 自分の心配をよそに危機感が全くない母親に怒りを感じた。

エ 母親との会話がかみ合わないことにばかりしくなってしまった。

問四 — 線部③「頼むよ」とありますが、「僕」は「母」にどんなことを「頼む」と言っているのですか。十五字以内で答えなさい。

問五 — 線部④「僕はため息を呑み込んで」とありますが、この時の「僕」の気持ちとしてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の言うことを聞こうとしない母親がうらめしく、それをどうにもできない自分をもどかしく感じる気持ち。

イ 久しぶりに息子と会えてはしゃいでいる母親を悲しませないように、もう何も文句を言うまいとがまんする気持ち。

ウ 落ち着きのない母親が部屋から出て行って、やっと静かにものが考えられるようになったとほっとしている気持ち。

エ 解決方法が見つからない問題を抱えた父母の生活が不安で、このまま二人を置いて帰っていいのかと迷う気持ち。

問六 — 線部⑤「老いの日々」を意味する二字の熟語を本文中から探し、抜き出して答えなさい。

問七 — 線部⑥「あの頃の僕は、なぜあんなにも父に反発していたのだろう」とありますが、「あの頃の僕」はどのようなことに対して「反発」していたと今の「僕」は考えていますか。六十字以内で答えなさい。

問八 — 線部⑦「父は強い人だった。……ところも、すべて」とありますが、このような「父」の様子を十字で表している言葉  
葉を文中から探し、抜き出して答えなさい。

問九 — 線部⑧「父との関係が微妙びみょうに変わってきた」とありますが、「微妙びみょうに変わってきた」原因はなんですか。五十字以内  
で答えなさい。

問十 — 線部⑨「問□無□」の空欄くうらんにあてはまる漢字を答えて、四字熟語を完成させなさい。

問十一 次の中から、本文の内容に合っているものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 若いころには「父」に反発していた「僕」であったが、「父」の本当のすがたを理解した今では「父」への強い共感  
と愛情だけをいだいている。

イ 「僕」は、年老いた両親の将来のことを考えて少し心配しているが、自分が手助けできないことに対してもどかしさ  
を感じ、暗い気持ちになっている。

ウ 「母」にとつて、「僕」はいまだに幼い頃のままの頼りない息子であり、年老いた「父」を一家の大黒柱として心から  
頼りにしている。

エ 「母」は、大人になった「僕」のそっけない言葉に少しさびしさを感じながらも、久しぶりに会う息子に好物を食べ  
させてやろうと張り切っている。

オ 田舎いなかで夫婦二人の生活を送る「父」は、将来の生活に不安を感じているが、厳しく育てた息子に対してその不安を口  
にすることができないでいる。

カ 「父」は、年老いたためにすっかり気が弱くなり、「僕」や「母」と一緒に会話をしたり、二人に自分の意見を伝えよ  
うとする気力を失っている。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、この文章は出典の第9講と第10講の一部から構成されている。

さまざまな問題を、僕たちはいつたどこからどう考え始めればいいのか？

その答えは、この世に絶対の「真理」なんてものではなく、いつさいは僕たち自身の「確信」や「信憑」である、ということだった。

だから僕たちは、「何が真理か」と問うのでも、「真理なんてない」と否定しつづけるのでもなく、お互いの「確信」や「信憑」を投げかけ合って「共通了解」を見出そうとする必要がある。

じゃあ、僕たちはなぜ、そしてどのように、さまざまな「確信」や「信憑」を抱いているんだろう？

本講ではこの問いについて考えてみよう。「これはグラスだ」とか、「この人は善人だ」とかいった「確信」や「信憑」は、いったいどのように僕たちにやって来るのだろうか？

この問いに最も原理的な答えを与えたのは、ニーチェやフツサル、それにフツサルの弟子のハイデガー（1889—1976）や日本の哲学者の竹田青嗣（1947—）などだ。

① 彼らの出した結論は、簡潔に言えば次のようなものだった。

僕らは世界を、僕たちの「欲望」や「関心」に応じて認識している。

A、僕は今日の前のグラスを飲み水を入れる容器として認識しているけど、なぜそのような「確信」が訪れているかといえば、僕が今「のどが渴いた」「のどをうるおしたい」という欲望を持っているからだ。

でも、もし僕が今だれかに襲われたなら、このグラスは反撃のための武器として認識されるかもしれない。あまりに退屈な時には、オモチャにだってなるだろう。

「この人は善人だ」という「確信」や「信憑」もおんなじだ。客観的な善人なんていない。僕の何らかの欲望や関心のゆえに、僕はその人を善人として認識しているのだ。

第3講で、僕たちは「事実の世界」に先立って「意味の世界」を生きているというお話をした。どんな「事実」も、それに僕たちが「意味」を見出さないかぎり、僕たちにとっては存在しない。



この「意味の世界」というのは、言葉をかえれば欲望の世界のことだといっている。長寿や健康への欲望がなければ、人体メカニズムの「事実」は僕たちにとって存在しないし、農耕のための知識や夜空の美しさへの関心がなければ、天体法則の「事実」もなかったはずなのだ。

世界はつねに、僕たちの欲望の色を帯びている。哲学者の竹田青嗣は、これを「欲望相関性の原理」と呼んでいる。『現象学は（思考の原理）である』。文字通り、世界は僕たちの欲望に相関して——欲望にに応じて——その姿を現すということだ。

いわれてみれば当たり前前、でもいわれるまでは意外に思いいたらぬ、哲学の基本にして最大の「奥義」のひとつといえると思う。

この原理が「原理」の名にふさわしいのは——つまりだれもが納得できる最も深い考え方といえるのは——これが僕たちにとって「たしかめ可能」な最後の地点だという点にある。

今、僕は目の前のケーキを食べたいと思っている。そしてその欲望を、確実に「たしかめる」ことができる。

僕には好きな人がいる。その人と、ずっといっしょにいたいと思っている。そしてその欲望を、僕はやっぱり疑いようなく「たしかめる」ことができる。

ところが、なぜ僕がそんな欲望を持っているのかと問われれば、とたんに確実なことがいえなくなってしまう。

僕が今ケーキを食べたいのは、頭が疲れて糖分を必要としているからかもしれない。あるいは、生クリームの柔らかさのような感じが、脳を刺激して舌に快感を求めよう指示を与えたからなのかもしれない。

仮説ならいくらでも立てることができる。でもそれはどこまで行っても仮説であって、何が僕たちに欲望を抱かせるのか、その絶対的な理由を知ることが決してできないのだ。

（中略）

④ 学校や仕事、家庭など、僕たちは日常生活のさまざまな場面で、日々信念の対立に遭遇する。「俺の考えは絶対に正しい、お前は絶対にまちがっている！」……そんなことを、僕たちはしばしば口にしてしまうことがある。

でも、これまでずっと述べてきたように、この世に絶対に正しい信念なんてものはない。

そう、僕たちの信念は、実は何らかの欲望や関心によって編み上げられたものなのだ。

たとえば、学校は子どもたちをびしっと統率しなければならぬと考える親や教師がいる。その一方で、学校は子どもたち一人ひとりの自由や自主性をできるだけ尊重しなければならぬと考える人たちがいる。

異なる信念を持つ両者は、時に激しく対立することがある。

〔B〕、この信念の次元で対立をつづけているかぎり、両者が理解し合うことはひどくむずかしい。「自分こそが正しい、お前はまちがっている」。そんな信念のぶつけ合いに、多くの場合終始することになるだろう。

そんな時に重要なのは、どちらの信念が絶対に正しいかと考えるのをまずやめることだ。そしてお互いの信念が、いったいどのような欲望や関心から編み上げられたのか、互いに吟味することだ。

たとえば、集団統率をよしとする教師は、かつて学級崩壊に苦しんで、そんな経験はもう二度とごめんだと思っているのかもしれない。だから統率力を発揮して、子どもたちをまとめ上げ、校長や保護者たちからその指導力を認められたいという欲望を持っているのかもしれない。

他方、子どもたちの自由や自主性を尊重すべしと考える人は、子どもの頃集団統率的なクラスになじめず、孤独な思いを抱えた経験があるのかもしれない。だからそんな疎外感を、今の子どもたちに味わわせたくないという欲望があるのかもしれない。

( 中 略 )

そこで次に重要なのは、<sup>⑤</sup>お互いのそうした欲望や関心が、本当に妥当かどうか吟味することだ。

「自分の統率力を認めさせたい」という欲望は、本当に子どもたちのためになっているといえるのか？ 「孤独を感じさせたくない」という思いは、本当は独りよがりな欲望にすぎないんじゃないか？ といった具合だ。

そうやってお互いの欲望の〔X〕性をたしかめ合いながら、僕たちは、徐々にお互いが納得し合える「共通関心」へと思考を向かわせる必要がある。〔Y〕な欲望・関心じゃなく、どちらも共有できる、もつと深い欲望・関心を考え合うのだ。

たとえば、自由尊重派の教師のみならず、集団統率派の教師も、子どもたちにはゆくゆくは自由に、〔C〕生きたいように生きられるようになってほしいという関心なら、きつと共有できるにちがいない。

でもだからといって、〔I〕。そのような関心もまた、両者は共有できるにちがいない。

第1講でいったように、僕たちが自由に生きるためには、他者の自由もまた認めることができなければならないのだった。

哲学ではこれを「自由の相互承認」の原理と呼んでいる。

この原理の重要性を、両者はきつと「共通関心」として持つことができるはずだ。

とすれば、僕たちは「集団統率か、自由尊重か？」といった対立をつづけるのではなく、子どもたちのゆくゆくの自由と、その「相互承認」を育むという「共通関心」を、どうすれば実現することができるのか、共に考えていけるようになる。

信念対立は、その時対立から協同へとひっくり返るのだ。

D、実際の信念対立の現場では、とりわけ感情が邪魔をして、事はそう簡単には進まないだろう。でも、もし僕たちが本気で対立を乗り越えたいと思うなら、こんなふうにお互いの欲望・関心の次元にまでさかのぼり、その上で、お互いが納得できる共通関心と、それを叶えるためのよりよい第三のアイデアを見出し合っていくべきなのだ。

（苦野一徳『はじめての哲学的思考』より）  
※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

（注1） 信憑……信用すること。

問一 文中の A 〱 D にあてはまる語としてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア でも      イ だから      ウ もちろん      エ では      オ たとえば      カ つまり

問二 ——線部①「彼らの出した結論」とありますが、「彼ら」はどのような結論を出したのか。その説明としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 人間が何かを理解するとき、そのとき置かれた状況に応じた欲望や関心が影響するということ。

イ 人間が何かを認識するとき、この世に絶対的に正しい真理は存在しないという確信が関わってくるということ。

ウ 人間の確信や信憑には、だれにでも理解可能なものを表現したいという欲望や関心がうずまいていくということ。

エ 物事のとらえ方は人によって異なるので、人それぞれ持ちやすい欲望や関心は異なって当然だということ。

問三 — 線部②「欲望相関性の原理」とありますが、これに関連した具体的な例としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア もともと勉強へのやる気はなかったが、勉強によって教養を深め、成長することができた自分を思い浮かべているうちに、勉強の奥深さがわかってきた。

イ 野鳥観察が趣味の友達に連れられてバードウォッチングをしたが、鳥に関する知識がないので、鳥同士の細かい違いに気づけずに終わってしまった。

ウ 有名ブランドの服に高い値段が付くのは、多くの人々がその服を欲しがることで、売り手が高く売ろうと考えて、値段を高め設定するからだ。

エ 親がテニスで優秀な成績を収めていたため、自分にだってきっとテニスの才能はあるだろうと信じて、毎日テニスの練習を欠かさないようにしている。

問四 — 線部③「奥義」とありますが、この「奥義」の説明としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 人間の欲望によって世界は変化しつづけるといふ、いわれてみれば当たり前で正確な考え方。

イ 人間の欲望によって私たちは深い考え方を得るといふ、だれもが納得できる基本的な考え方。

ウ 人間の欲望によって意味を見いだされたものが世界に現れるといふ、哲学の最も肝心な考え方。

エ 人間の欲望によって私たちは正しい物事と密接にかかわりを持っているといふ、単純な考え方。

問五 — 線部④「学校や仕事、家庭など、僕たちは日常生活のさまざまな場面で、日々信念の対立に遭遇する」とありますが、筆者はこうした対立があった場合にはどうすることが必要だと考えていますか。五十字以内で説明しなさい。

問六 ———線部⑤「お互いのそうした欲望や関心」とありますが、この「欲望や関心」は何から生まれていますか。本文中から二字で抜き出して答えなさい。

問七 文中の X・Y にあてはまる語句として適当なものを、それぞれXは二字、Yは五字で本文中から抜き出して答えなさい。

問八 文中の【 I 】にあてはまる表現としてもっとも適当なものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

- ア 孤独や疎外感をそのままの形で、そのまま放置しておくわけにはいかない
- イ 自主性を尊重する教育のあり方こそ、教育上最もふさわしいものである
- ウ 子どもたちのわがままな自由を、今教室でそのまま認めるわけにはいかない
- エ 統率性と自主性を教室の中で両立させることが、今教室で求められているはずだ

問九 ———線部⑥「第三のアイデア」とありますが、本文中の教師間における「第三のアイデア」としてふさわしくないものを次の中からひとつ選び、記号で答えなさい。

- ア 自主性が重んじられるべきときと、集団としての規律を守らせるべきときのめりはりをクラスに持たせるため、教師同士で学校のさまざまな活動ごとに、どちらがふさわしいかあらかじめ決めておく。
- イ 子どもたちの自主性を将来的に認めていくという合意のもと、必要なルールとそうではないルールを整理し、子どもたちの意見も聞きつつ、少しずつ子どもたちに任せる活動を増やしていく。
- ウ 互いの自由が相互承認され、同時に全員にとって居心地のよい空間にしていくために、自由な空間の良さとその欠点について意見を出し合い、まずは必要な自由とそうでない自由を区別していく。
- エ 自由尊重、集団統率のどちらの立場を重視するかについては、子どもたちの意思を可能な限り尊重することが何より大切なので、子どもたちの意見に従って教師が今後の方針を定めていく。

問十 次の学校の校則に関する教師と生徒の議論を読んで、教師側と生徒側どちらもが納得できる「共通関心」について、「教師と生徒は共に……という「共通関心」を持っている。」という形に当てはまるように三十字以内で説明しなさい。

【テーマとなる校則】

スマートフォンを学校の中で使用可能とするかどうか

教師 現在、スマートフォンは学校に持ち込んでよいことになっていますが、電源を切ってカバンにしまうのが規則です。その規則を改正して、学校内での使用を認めてほしいということですか？

生徒A おっしゃるとおりです。スマホは勉強に役立てることができません。例えば、調べものとかアプリを使った授業も可能になると思います。

教師 しかし、授業中にゲームをしたり、関係ないサイトを閲覧されたりしてしまつては、授業に集中できなくなつてしまいますよね。もちろん調べものや資料など作成したりすることはあると思います。貸出用のパソコンなどの機器が学校にはありますので、ぜひそれを使つてください。

生徒B 貸出用のパソコンは大きいので使いづらいです。スマホはかさばりません。いまやほとんどの生徒がスマホで検索しながら勉強しています。授業中に許可してくださいれば、生徒の学力も上がると思います。

教師 私たちが気にしているのは、ゲームや関係ないサイトを見ることばかりではありません。授業中の様子をこっそり録画したり、黒板を写さずに写真を撮つて済ましてしまつたりする人が出てしまうことも心配しています。

生徒C それを言い始めたらきりがありません。もちろん私たちだって、先生方の授業に集中することが大事で、スマホの使用が主になってはいけないと思います。でも勉強するのに便利なものは使用を許可すべきです。そちらの方が生徒にとっては大切なことではないでしょうか。

教師 先生だって便利なものは使ってもらいたいと思うこともあります。一方で先生たちは授業で大切なことを説明しています。だから、それに集中できない人が出てきてしまうなら、やはりスマホの使用を認めることはできません。

三次の短文中の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- |   |                   |    |                     |
|---|-------------------|----|---------------------|
| 1 | 将来はヨウジ教育に取り組みたい。  | 2  | ダントウのため、今年は雪が少なかった。 |
| 3 | キタク時間を母に伝える。      | 4  | 服についた茶色いシミが気になる。    |
| 5 | 父の趣味は切手のシユウシユウです。 | 6  | キュウキュウシヤの到着を待ちつづける。 |
| 7 | 道路をカクチヨウする。       | 8  | この車はよくコシヨウする。       |
| 9 | 大会でシヨウヒンをもらった。    | 10 | 白鳥が湖にヒライする。         |

